雑記帳

作家論

「うたゝねの記」のこと

その時の文学の才能の高さは、女性文化を見れば、よい。

その時の結が女性の言葉から再発されたとき、明治が陶冶時代から明確になる。

いさよひのね記の作者の時代の後鳥羽院時代の後鳥羽院論のべるつもりである。

「いさよひは古い昔に一読したまゝで忘れてゐた。

重視されなかつた

のだ。

だから、よしで、

他の文人

さうかしくるひならこと

とを知つた。

それは作者の部屋に、

しのしいさよひ」の作者の別名といはれる「うたゝねの記」を一読して、私は心つよく思つた。

保守的、

保守的、更級とへてきた、王朝の心理文学は「たゝね」に於て、すべてを超えてゐて

みよのらでみる。私はなのうしの心理文学の造型のあつたことを初めて知つて驚いたのである。

その心理描写に於ては、作者は更級に

「たゝね」の終末を化の結婚れなほなばぬとこ